

スピノザの身体論

『エチカ』における「個体」と「形相」の概念を中心に

秋保 亘(慶應義塾大学)

スピノザは『エチカ』第2部以降において、この著作最大のもくろみである「人間精神とその最高の至福の認識」へと私たちを導きうることからの論証に着手する[E2I]¹。そして私たちの「生において何よりも有益であるのは、知性あるいは理性をなすうかぎり完成することであり、この一点に人間の最大の幸福あるいは至福が存する」と語るスピノザは[E4A4]、たしかに精神のうちにこそ求められるべき至福のありかをみているし、さらに、至福の議論の中核をなす精神の永遠性が、「身体の実在への関係なしに考察されるかぎりでの精神」について示されるものであるという[E5P40CS]。このようにみえてくると、『エチカ』の体系において「身体」が果たす役割はそれほど大きなものではないようにも思われる。

しかしながら、実情は決してそうなっていない。というのも、何よりもまず精神は身体を対象とする観念として規定され[E2P13]、それにもとづいてさらに「精神と身体はひとつの同じ個体」と言明されることになり[E2P21S]、かくて精神の何たるかを理解するためには、「その対象[...]すなわち人間身体の本性を認識することが必要」だからである[E2P13S]。くわえて、三種の認識(表象・理性・直観)が区別されるのは、それぞれの認識において身体の果たす役割に応じてのことに他ならない。つまり、1/身体が他の物体からはたらきを受けるさいに生じる「身体の変状[*affectio*]」こそが「ものの表象像[*imago*]」とよばれ[E2P17S]、だから各人は「自己の身体の状態[*dispositio*]」に応じて、ものの普遍的表象像を形成する[E2P40S1]。次に、2/「理性の基礎をなす」「共通概念」[E2P44C2D, E2P38C]は、何よりも「私の身体と私を[...]触発する他の物体とのあいだの共通なもの」を見出すことから出発して形成される²。最後に、3/第三種認識の導出の中心に位置づけられるのは、個々の人間身体の本質を表現する観念に他ならない[E5P22]。そのうえスピノザは、「精神の至福にかかわるすべてのこと」が「感情」に対する「精神あるいは理性の力能」を認識することから導かれると語るが[E5Praef]、感情もまた「身体の活動力能」という概念を軸に定義されるのである[E3Def3]。かくて『エチカ』において「身体」はきわめて重要な役割を担っている。

以上にみてきた各々の論点において身体が果たしている役割を精確にみてとるためには、まずはスピノザが人間身体の特質をどのように規定しているのかという点を検討しなければならない。スピノザが身体・物体にかんして「専門的に論じる」わけではないと断りつつも、それについての議論を展開するのは第二部に挿入された「物体の小論」[E2P13SAx1-L7S]においてである。本発表は、この小論において提示される「個体」とその「形相」という概念に焦点を当て、『エチカ』における人間身体の身分とその特質を明確化することを試みる。

『エチカ』の体系において、もっとも基礎的な存在者は実体、

すなわち「神あるいは自然」[E4Praef]であり、個々の人間身体や自然のうちに存する諸物体はこの実体の様態という身分を与えられる。つまり個々の身体・物体は、全体としての自然の一部をなすものにすぎない。そして「物的実体は、それが実体であるかぎり分割されえず、この意味で実体としての「物質はいたるところで同一であり、そこにおいて諸部分が区別されるのは、私たちが、物質が様々な仕方に変状すると概念するかぎりにおいてのみであり、したがって物質の諸部分はたんに様態的にのみ区別されるのであって、事象的に区別されるのではない」[E1P15S]。このような体系においてはそれゆえ、個々の物体・身体をまさに個々のものとして弁別し、それら各々の個別性を確保することはきわめて困難であるようにみえる。様態は独立自存的な存在者ではないからである。「個体」とその「形相」という概念こそが、個々の身体それぞれを、いわばひとつの相対的に閉じたシステムとして記述することを可能にするものであると考えられる。

ところでスピノザは、「身体の形相」という表現を用いる[E2P24D, E4P39D]。いわゆる「並行論」をとるスピノザにとって、この身体の形相は魂ないし精神ではありえない。身体の形相はあくまで延長属性のもとで説明され、また理解されなければならない。つまり、人間身体も他の物体と同様に、その「運動と静止の原理³」を、魂ではなく物的自然本性に求めなければならないのである。そこでスピノザが提示するのは、「人間身体の形相を構成する」、その諸部分が相互に有する「運動と静止の *ratio*」という概念である[E4P39D]。ところがこの「運動と静止の *ratio*」ということで何を理解すべきかということが問題となるや、スピノザ研究史上様々な解釈が提示されている。たとえば Matheron は、この *ratio* を、或る個体のもつ「運動の総量と静止の総量とのあいだの比」と解釈し、これに数学的な表現を与えようと努める⁴。しかしながらこのような解釈は、Gabbey もいうように、そもそも「運動と静止の計測単位についての」「数学的説明」がなければ無意味であろう⁵。スピノザ自身は決してそのような単位の説明を与えないのである。本発表では、この *ratio* の内実を厳密に数学的に解釈することよりも—おそらくこのような方向性はスピノザのテキスト自身が許さない—この *ratio* の概念によっていかなることがらの説明が可能となっているのかという点を中心に検討を加えていく。

³ デカルト『哲学原理』第2部23項、ATVIII, 53:3-4.

⁴ Alexandre Matheron, *Individu et communauté chez Spinoza*, Paris, Minuit, 1968/1988, p. 40.

⁵ Alan Gabbey, *Spinoza's Natural Science and Methodology*, in *The Cambridge Companion to Spinoza*, edited by Don Garrett, Cambridge, Cambridge University Press, 1996, pp. 142-191, p. 168.

¹ 『エチカ』の参照箇所は *Studia Spinozana* の Citation Conventions にしたがって表記する。

² Gilles Deleuze, *Spinoza-Philosophie pratique*, Paris, Minuit, 1981/2003, p. 129.